

戦乱がもたらすものは

中野 理恵

見終わって、例えようもない悲しさとやるせない思いでいっぱいになった。

旧ユーゴスラヴィア連邦から、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが独立を宣言したのは1992年。NATOの仲介により1995年12月、和平協定が成立するまで、彼の地では戦乱が続いた。本作は、1995年7月、セルビア人勢力により8,372名のボシュニャク人が虐殺された〈スレブレニツァの虐殺〉を題材にした劇映画だ。アイダとは、国連軍の通訳として、セルビア人勢力との交渉に立ち合いながら、夫と10代の二人の息子をセルビア人勢力に殺された女性の名である。

舞台となったスレブレニツァは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを構成するスルプスカ共和国東部の町。国連により〈安全地帯〉に指定され、派遣された国連軍施設では既に多くの避難民を受け入れていたが、実は施設は孤立状態だった。1995年7月11日、2万の市民が助けを求めて国連軍施設に押し寄せたが、満杯状態だった施設のゲートは開かれない。アイダは、平原を埋め尽くす人の波を目の当たりにする。この情景描写は圧巻だ。群衆の中に家族を探すアイダ。セルビア人勢力のムラディッチ将軍との交渉役として、避難民の中から3人の民間人を出すようにと命じられたアイダは、「夫は高校の校長で村一番のインテリだ」と訴え、夫と息子を国連軍施設内に。夫は企業の重役男性と計理士女性と共に将軍との交渉に臨む。

将軍は、市民の協力と武装解除を条件に避難民とオランダ軍を攻撃しないと約束し、国連軍司令官は「国連軍がバスに同乗し、避難計画も立てる」と応じて合意に至った。だが、計理士女性は「あんな茶番」と信じていない。その言葉を裏付けるように、交渉中、国連軍の施設内に武器を持ったセ



©2020 Deblokada / coop99 filmproduktion / Digital Cube / N279 / Razor Film / Extreme Emotions / Indie Prod / Tordenfilm / TRT / ZDF arte

ルビア兵が入り込み、兵士の有無を調べ始めていたのだった。アイダは撤退する国連職員リストに家族を載せて欲しい、と懇願するが叶わず。次々と到着するバスに男性だけが乗せられ、国連軍の同乗は無視。バスが到着したのは学校の体育館のような場所。表では子どもたちが遊んでいる。やがて複数の銃口が男たちに向けて発砲された。

映画の中で「ムスリムの女」とセルビア人勢力が口にしていたので、虐殺の原因は宗教なのかと思った。セルビア人はキリスト教の一派であるセルビア正教、ボシュニャク人はイスラム教。本作の原題“QUO VADIS, AIDA?”の〈QUO VADIS〉は新訳聖書にも出ている。だが、更に調べると、どうやらそれだけでもないようで、政治家が対立を煽ったような情報もある。いずれにしても犠牲になったのは市井の人々だ。悲しい。

脚本・演出の1974年サラエボ生まれの女性、ヤスミラ・ジュバニッチの技量は素晴らしい。本作は2021年アカデミー賞国際長編映画賞候補になった他、数多くの映画賞や映画賞候補に選出されている。傑作だ。辛いが多くの人に見て欲しい。

《Cinema Information》

『アイダよ、何処へ?』

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、オーストリア、ルーマニア、オランダ、ドイツ、ポーランド、フランス、ノルウェー、トルコ合作映画(101分) / 監督: ヤスミラ・ジュバニッチ / 9月17日(金) Bunkamuraル・シネマほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。